

“マエストロ小林研一郎 80th 祝祭演奏会 VOL.2”

チャイコフスキー交響曲全曲チクルス

音楽に対する真摯な思い、深く情熱的なチャイコフスキーの演奏に期待。

文：伊熊よし子（音楽ジャーナリスト）

[チャイコフスキーの音楽の根底に潜んでいるのは苦悩、悲劇、悲哀、慟哭など。これこそがチャイコフスキー。私はそれを表現したい]

あらゆるジャンルに名曲を残したチャイコフスキーが、2020年に生誕180年を迎えた。これを記念し、『熱血コバケン』『炎のマエストロ』の愛称で親しまれている小林研一郎が日本フィルハーモニー交響楽団を指揮し、チャイコフスキーの交響曲全曲チクルスを行う。昨年の公演が延期された形だが、いよいよそれが実現されることになった。

コバケンは1974年に第1回ブダペスト国際指揮者コンクールで優勝の栄冠に輝き、以来ハンガリー国立フィル、チェコ・フィル、日本フィルをはじめさまざまなオーケストラの要職を務め、現在も日本と欧米を行き来する超多忙な生活を送っている。

「私は芸大の作曲科を卒業してから25歳で指揮科に入り直し、34歳まではもがきの時期を経験しています。世に出たくても手段がなかった。そうこうするうちにコンクールの年齢制限に引っかかるようになり、ブダペストのコンクールは唯一私が受けられるものだったのです。短期間の準備で臨んだコンクールでしたが、勝利の女神が微笑んでくれたため、いい結果を得ることができました」

以来、国内外のオーケストラを指揮し、情熱的で一途に作品の神髄に迫る演奏を行う。

「でも、私は作品に潜むペシミスティック（厭世的、悲観的）な面を冷静に見つめ、それを描き出す演奏を好んでいます。チャイコフスキーの作品もあらゆるところにペシミスティックな表現が隠されています。けっして明るく楽しい音楽ではない。もちろん、舞踏のリズムに根差したリズムやおだやかな主題もありますが、根底に潜んでいるのは苦悩、悲劇、悲哀、慟哭など。これこそがチャイコフスキー。私はそれを表現したいのです」

チャイコフスキーの交響曲はロンドン・フィルと全曲録音も行っている自家薬籠中の作品だが、常に初めて楽譜を見たときのような新鮮な気持ちを抱いて指揮台に立つ。そんなコバケンの作り出す音楽は、熱く強く心の奥に深く浸透してくるもの。そこには「ひとりでも多くの人にクラシックを好きになってほしい」という信念が息づいている。そのためには「新しいアプローチが命」と力説する。これまで聴き慣れた作品にも新風を吹き込み、まったく新しい作品のように生まれ変わらせる。

「私は毎日、朝から楽譜と対峙していますが、いつもほんの小さな発見に心が高揚します。“ああ、この作品は長年指揮しているのにまだこんな発見があった、作曲家にもっと近づかなくては”という思いを強くするわけです。音楽家は一生勉強で、学びに終わりはありません。指揮の世界というのは高みを知れば知るほど行き詰る世界。100人を超えるオーケストラ、その才能ある集団をどうしたら輝かせることができるか、それをいつも考えて指揮しています。僕は常にアブノーマルな響きをオーケストラから引き出したい。聴衆を別世界へいざなう幻想的な演奏をしたいのです」

コバケンは2006年からオランダのアーネム・フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者を務めている。このコンビによる最初の録音として、彼の十八番とも呼ぶべきベルリオーズの「幻想交響曲」が取り上げられたとき、私はアーネムまで取材に出かけた。彼はこのとき若手奏者が多いオーケストラにカツを入れるようにはげしいリハーサルを行い、燃え上がるような演奏を引き出した。アーネムはのどかな美しい町。オーケストラも土地柄を映し出し、ロマンチックで豊かにうたうのびやかな演奏を特徴としていた。だが、コバケンの音楽に没入する精神とひたむきな指揮に導かれ、「幻想交響曲」はまさしく炎と化した。

そこにはこれまで聴いたことのない世界が広がり、聴き手の心を震わせた。今回はその音楽に対する真摯な思い、深き情熱をチャイコフスキーの演奏から受け取りたい。